

ロマン^{いざな}誘うインド亜大陸

—印パ卒業生の会ミレニアム総会に寄せて—

東京外国語大学 学長 中嶋嶺雄

私は国際関係論を専門とし、対象地域は中国・東アジアであるけれど、中華世界に比してのインド的世界には、なんとなく夢があり、豊かな色彩があるように感ずる。それは、私がインド的世界にまだなじみが薄く、未知の世界への憧れの気持ちが依然として強いからかもしれない。

インドとは宗教の異なるパキスタンも含めて、インド亜大陸への私の個人的な出会いの最初は、今から30年前の1970年にカラチへ立ち寄ったときであった。もっとも、それ以前の大学院時代に、半分はアルバイトをさせていただいたようなものであろう、アジア経済研究所の「インド・パキスタンの棉業と経済開発」プロジェクトに研究委員として加えていただき、専門でもないのに、パキスタンの棉花仲買人 (Merchant Agency) と棉花の流通経路について論文を書いたことがあった。

それだけに一度は現地を踏んでみた

かったのだか、たまたま私が外務省特別研究員として香港に留学中、モスクワの第14回国際歴史学会に出席することになり、香港—バンコク—カラチ—タシケントのルートでモスクワ入りしたときにパキスタン行きが実現した。カラチの街中ではラクダが自動車代わりをしている風景に出会って驚いたりしたが、やはりインダス川を眺めてみたいと思い、一日車を雇って行ってきた。そのときに訪れたタッタ遺跡の近くの小さな農村の市場で見つけた土製の花瓶がとても気に入っていて、いまでもわが家の書斎に大切に飾ってある。邦貨にして100円程度のものであった。

その後もニューデリーへ立ち寄ったり、デリー大学やJNUを訪問したりすることはあったが、1986年5月にインド文化交流協会 (ICCR) の招待でインドの知識層を対象に「中国の内政と国際関係」と題する講演旅行をインドの各地で行ったことが忘れが

たい。テーマが関心を呼んだのであろう、ニューデリーの国際文化センターでの講演には、会場に入りきれないほどの文化人・ジャーナリスト・外交官などが集まってくれた。そのかわり、まだ時差もとれないのに、あの強烈な炎暑のなかをボンベイ大学へ着いた途端に二時間も英語で講演させられるというハード・スケジュールにも耐えねばならなかった。

インド南端のケララ大学では、粗末な校舎で私の講義を懸命にノートを取り、熱心な質問を浴びせてきた学生の姿が印象に残っている。その折りには、かねて一度はそこに立ってみたかったインド亜大陸最南端のコモリン岬へ行き、“永遠の処女”を意味する聖地カニヤ・クマリでアラビア海、ベンガル湾、インド洋が交わる海水に身をつけ、帰り道のカニヤ・クマリ寺院では上半身裸になってヒンズー教の密教的世界へ特別に案内された経験もある。このときは、トリバンドラムからスリランカの首都コロンボへと向かった。

1959年の中印紛争や60年代初等のケララ共産党州政府樹立、70年代初頭のキッシンジャー隠密訪中など、私の研究テーマに関係する出来事もインド亜大陸には多いが、それにもまして私にとっては遙かなるロマンが漂う

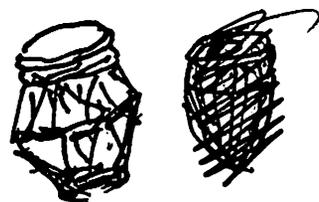
インド亜大陸なのである。

明治41(1908)年の東京外国語学校におけるヒンドゥスターニー語・タミール語の開設以来、戦後のウルドゥー語専攻の設置を経て、本学のインド・パーキスターン系は永い伝統を有し、多数の優れた人材を世に送り出してきた。碩学・蒲生禮一先生をはじめ、土井久彌先生、黒柳恒男先生といった斯界の権威も、その伝統を担われてきた。

このようなインド・パーキスターン系の輝かしい歴史と伝統をさらに発展させるためにも、卒業生の皆様の積極的なご提言やご批判を、「世界に開かれた大学」としての府中新キャンパスをオープンしたばかりの本学は、心からお待ちしている。

ーアジア太平洋大学交流機構(UMAP)理事会・年次総会に国際事務総長として出席のため訪韓する機中にてー

TABLET
(タブラ)



カット 絵：杉浦昭光 (37U)